

小児における尿中細菌叢：その存在と病的意義の検討

赤川 翔平（関西医科大学 小児科学講座）

この度は第 30 回日本小児泌尿器科学会総会・学術集会学会賞を賜り、大変光栄に存じます。このような名誉ある賞を賜りましたのも、関西医科大学小児科学講座の金子一成教授、辻章志先生、木全貴久先生、山内壮作先生をはじめ、研究に携わって頂いた多くの関係者の方々のご指導とご協力のおかげであり、心より感謝申し上げます。

ヒトの体では 40 兆個以上の細菌が消化管、皮膚、膣などで細菌叢を形成し、宿主の健康に深く関与しています。これまで健康なヒトの尿は無菌であると考えられていましたが、近年の研究で尿中にも細菌叢 (urobiome) が形成されていることが明らかとなってきました。成人では urobiome の乱れ (dysbiosis) が過活動膀胱など様々な病態に関与するとの報告が散見されますが、小児における報告はほとんどありません。

本研究では健康小児と昼間尿失禁を呈する小児を対象とし、urobiome を解析しました。その結果、健康小児においても urobiome が存在すること、昼間尿失禁を呈する小児患者の urobiome では Bacteroidales 目に属する菌の割合が減少していることを明らかにしました。このことから、urobiome の dysbiosis が昼間尿失禁に関連している可能性が示唆されました。本研究成果は今後、昼間尿失禁を始めとした腎泌尿器疾患の病態解明に貢献できる可能性があり、さらに将来的には urobiome をターゲットとした新たな治療法の開発に繋がることも期待されます。まだ発展途上の研究分野であり、引き続き精進して参りたいと思います。今後とも一層のご指導・ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。